

さようなら カササギの島

コリン・ティーラ 作 三宅興子 訳 金尾恵子 絵



訳者

三宅興子

大阪生まれ。大阪市立大学
家政学研究科大学院卒業。
現在、大谷女子短期大学教
員。専門は、イギリスの児
童文学で、絵本の成立史や、
ファンタジーの歴史を、19
世紀を中心として研究して
いる。著書は、共著で、「英
米児童文学」(中教出版)や、
共編著として、「叢書児童文
学」(世界思想社)などがある。
現住所 = 大阪市西区南
堀江 4 - 8 - 2 - 309



金尾恵子

画家

1970年ごろから動物や鳥の
絵をかきはじめ、図鑑や幼
年雑誌、科学読み物に絵を
かいてきた。おもな著書に、
「セキレイの歌」「ウミガメの
大洋航海」「鳥一くらしとな
かま」(以上文研出版)「いし
がめ」(福音館)などがある。
将来、野生動物と人間の生
活とのかかわりあいをかき
たいと思い、毎年アフリカに
旅行している。現住所 = 大
阪市東淀川区淡路新町36

基本カード記載例

さようなら カササギの島《文研子どもランド》

訳者 三宅興子 発行者 佐藤武雄

N.D.C.933 コリン・ティーラ作 三宅興子訳
さようなら カササギの島
文研出版 1981 80p 23cm 文研子どもランド

発行所 文研出版 東京都文京区向丘 2 - 3 - 10

大阪市天王寺区大道 4 - 128

© O.Miyake 1981

印刷所 岩岡印刷株式会社

製本所 倉橋製本株式会社

さようなら カササギの島



コリン・ティーラ 作
三宅興子 訳
金尾恵子 絵

《むつかしいことば》

物語にでてくるむつかしいことばには、そのことばの右肩に数字がつけてあります。79ページの、その数字のところをみてください。

MAGPIE ISLAND

Text copyright © 1974 by Colin Thiele

Japanese translation:

© 1981, by Bunken Shuppan (A division of Shinko Shuppansha Keirinkan)

Japanese translation rights arranged with RIGBY LIMITED through

Japan UNI Agency, Inc.

さようなら カササギの島



はじめに

世界的に有名な鳥類学者、ジョン・ゴールド（一八〇四—一八八一年）は、イギリスにいる人たちにオーストラリアのカササギの歌声をきかせたいものだといっている。しかし、その歌声がどのようなものかについては、のべておらず、美しすぎて、人間のことはでは、とうてい表現することはできないと語っているだけである。

ゴールドのいったカササギとは、オーストラリア産の白い背中をしたカササギのことで、ゴールドは、学名をギムノーヒナ・テビセン・ヒポルーカと名づけた。それは、カラス科の一種であるイギリス産のカササギとはまったく関係はないが、おもに東オーストラリアにみられる黒い背中をしたカササギと近い関係にあり、色を除いては、細部にわたるまでよくにている。

白い背中せなかをしたカササギは、南オーストラリアの州しゅうの鳥になっているが、土地の人でさえ、まちがえて、モズとよぶこともある。

カササギは、田園でんえんがすきである。とくにまたたがやしていない畑や、ひらけたやぶで、たくさんがいちりゅうの害虫をたべる。カササギは、がっちりした肩かたと、強い、よく役だつくちばしをした身のひきしまった美しい鳥である。きりつとたち、堂々どうどうと歩く。きっぱりしたり、おこつたり、自分を守ろうとかまえるときなどもあるが、おもしろいことをみつけるのがうまく、目をきらきらと輝かがやかせていることがよくある。

しかし、カササギが有名ゆうめいなのは、なんといってもその歌である。明けがたや夕ぐれに仲間なかまとともに歌うコーラスはすばらしい。まるで教会のたくさんかたの鐘かねがなりひびくように、よろこび歌う声がつづき、田園でんえんにひろがっていく。カササギはめすによびかけたり、仲間なかまをよんだり

するだけではなく、よろこびそのもののために、人生の豊かさのために、そしてこの世の魔力、驚異、美のためにも歌う。

私の育った田舎では、白い背中をしたカササギは、日の友であった。この話は、カササギによせる作者の気持をあらわそうとしたものである。

コリン・ティーラ

南オーストラリア州アデレード 一九七四年

これは、一羽^わのカササギの話である。

カササギにも、しあわせなときや、さびしいときがある。あるときは、しあわせな気持^{きもち}で、高い高いゴムの木にとまって、ピンク色に光るビーズ玉のような朝やけの光を、のどのなかにころがしてさえずる。またあるときは、さびしさのあまり、涙^{なみだ}がくちばしをつたって、したたりおちんばかりになることもある。このカササギも、そのようであつた。

話をはじめのまえに、このカササギには名まえがなかつたことを、いっておきたい。もちろん、つけようと思えばつけられたわけだし、でつちあげて、たとえば、カササギ・マーティだとか、カササギ・メリーとか、おしゃべりチャーリーとか、よぶこともできただろう。

しかし、それではごまかしになる。そうした名まえは、かごのなかにとじこめられたり、裏庭^{うらにわ}でくさりにつながれている鳥のものである。人にかわれていると、鳥は、ふさぎこんだり、金切り^{かなき}声をあげたりするようになり、まるで古びたレコードさながら、きんきんした、耳ざわりな声で、くりかえし、くりかえし、数少ないことばをがなりたてるようになる。

このカササギは、そのような鳥とはちがつていた。



このカササギは、南オーストラリアのひらけた田園にすむ、元気で自由な鳥なのだ。

そこは、エア半島とよばれる、大きい三角形をした土地であった。

カササギは、わかく、しあわせにくらしていた。こぶしのようにかたく、ふしだらけの棒きれでできた、ひろいでこぼした巢のなかで、卵からかえったばかりだった。巢では、母親が卵を二つだいていた。それは、青、灰、うすむらさきという、かわいい色をした美しい卵だった。カササギは、三週間でその卵からかえったのだ。

うまれたとき、このカササギの子は、毛がなく、しまりのないからだど、大きなつるんとした頭、小さな用をなさないうつばさをしていた。まったくみばえのないしろものだった。巢のなかですわろうとしても、なかなかうまくいかなかった。

しかし、その子は、みるみる大きくなった。くちばしをいつも上にむけてあげ、父さんが母さんが、えさを入れてくれるのを待っていた。えさは、カブトムシか、ミミズか、やわらかく太った地虫だった。おなかをすかしては、くちばしをさわがしく動かし、妹よりも上につきだしては、目をパチツとまたたく

よりもすばやく、なんでもむきぼりくつたものだ。羽^{はね}がはえてくるころには、からだも丸々^{まるまる}として、力強くなってきた。

カササギは、妹よりもはやくとぶことをおぼえた。とぼうと、練習^{れんしゅう}しているところをみるのは、ちよつとしたみものであつた。巢^すのはしにたち、そよ風のなかでつりあいをとつては、ぴよんととんでみたり、はえそりいかけているつばさをばたばたさせたり、ひろげたりした。父さんと母さんは、そばでずつとみていた。両親^{りやうしん}は、そわそわ動きまわったり、頭をかしげながら、じつと静^{しず}かにすわっていたりした。

しかし、とべるようになるまでに、そう時間はかからなかつた。はじめは、巢^すからどきつとおちた。つきには、ころがりおちても枝^{えだ}につかまるようになった。そして、ふらふらしながらも、すこしとんで、となりにある木にうつれるようになっていった。こうして、カササギは、すぐさま自分の力でとべるようになっていたのだ。

このカササギの子は、もともと、風、光、ひろいひろい空がすきだつた。ほどなくして、早朝の空を高くとべるようになり、一羽^{ひとわ}か二羽^{ふたわ}の、ほかのおさないカササギとともに、まるで黒い^{くろい}ががまいあがつたところでもみえるところまで、高く

のぼっていった。そして、つばさのいっぽうをおしたてて、空を急降下^{きうこうか}し、さつと横すべりにきりかえて、地上すれすれにとんだ。つばさは、鉄の羽^{はね}でおおわれてでもいるように、ぎざつという音をたてて、空気をふるわせた。夜明けに、牛のミルクをしぼりに牧場^{ぼくじやう}にやってくる少年たちは、その音をきいて、空をみあげたものだ。

カササギは、急降下^{きうこうか}から水平とびになったところで、垂直飛行^{すいちくひこう}から水平飛行^{ひこう}にきりかえたジェット機のように、少年たちの頭の上を、さつと通りすぎていった。それから、むきをかえ、ゆつくりとおりてきて、お気に入りの木にすつととんでいってとまった。

そこで、すこし身づくろいをしてから、ビーズのような目であたりをみまわした。すぐさま、朝の力^{ちから}が、カササギをとらえてはなさなくなった。すきとおった光によつて、からだがあらわれたようになり、急降下^{きうこうか}したときのスピード感とよろこびが、さらにいっそう、つばさのなかでうずまいてくるのだ。そこで、カササギは、高い枝^{えだ}につま先だつて、からだのなかにみなぎっているものすべてを、その歌声にたくして、ほとばしりだすのだ。

こうしたカササギをみるのは、すばらしいことであつた。



カササギは頭をのけぞらせ、くちばしを空につきだし、のどの羽^{はね}をふるわせ
ていた。そうしているうちに、筋肉^{きんにく}はこきざみにふるえ、もりあがってきた。
それはまるで、だれかが、そのくちばしに、つゆをいくどもそそぎこみ、それ
をカササギがおもしろがつてうがいをし、のどのところで、ころがしているよ
うだった。

歌声は、夜明けにひびきわたった。これほどしあわせそうに、朝の空気を
ふるわせることのできるものはいないだろう。そうした歌声には、なれてい
るはずの農夫^{のうふ}でさえも、家でやいたパンにかぶりつくのをやめ、「ほら、カササ
ギの歌をきいてごらんよ。きょうも、この世^よは、しあわせなところだといっ
てるよ。」と、妻^{つま}にいうほどなのだ。

しかし、この世^よは、いつでもしあわせなところというわけにはいかなかった。
カササギにとつても、それは、おなじことだった。路上^{ろじょう}で死ぬ鳥^{とり}もいるのだ。
人間たちが、気がふれたように自動車をびゅんびゅんとばし、鳥にぶつかっ
ては、うなりをあげ、はねとばしていくからだ。風^{かぜ}がふくと、羽^{はね}があちこちに
とびかい、生きててもいるかのように、つばさがまえに、うしろに、ゆれるの
だった。しかし、そのからだは、ダンボールのようにかたく、いのちのかかわ

ないものになっていた。

また、ときには、みずから「スポーツマン」と名のる狩獵家^{しゅりやうか}どもがやってきて、「スポーツ用」のライフル銃^{じゆう}をふりまわすことがある。えものがみつからな
いときなど、的^{まと}がわりにカササギをねらい、わらいざわめきあいながら、「やっ
た！」と、はしゃいだりする。ひん死の鳥は、枝^{えだ}の上にかくつとくずれおち、
わずかのあいだ、必死^{ひっし}に枝^{えだ}にしがみついているが、やがて地面^{じめん}におちてしまう。
狩獵家^{しゅりやうか}のなかで、「カササギって、保護鳥^{ほごちゆう}じゃなかったか？」と、バツのわる
い思いをする人もいるが、いわれた相手^{あいて}は、わらいながら「保護鳥^{ほごちゆう}だって、そ
れがどうしたんだ？」と、こたえるだけだった。

それにくらべれば、このカササギは、運^{うん}がよかった。狩獵家^{しゅりやうか}どもの目につく
こともなく、道路に追いつめられることもなかった。朝や夕べの光のなかで、高
く舞^まいあがっていったときなど、やぶのはるかむこうに、道がひろがっている
のをみわたすことができた。道にそって、もうもうと、こがね色のほりがたつ
ていることもあった。ほこりの雲のさきには、いつも虫がいるようにみえた。
その虫は、車の形をしているのだった。

自由自在^{じざい}にとびまわっているうちに、カササギには、いろいろのものがみえ

るようになってきた。農家、納屋、ほし草、豚小屋、ずんぐりした古いタンク、なめらかで丸味をおびた輸送管。南西のはるかかなたには、光る海がみえ、大気がすんで、きらめいているときには、遠くがみえた。そこは、木々がまばらで、大地が、ひろい平らな草原になつていると、カササギは思った。じつは、そこは、ナラボー岬の先だつたのだ。

あのワシさえいなかったなら、このカササギは、まぎれもなく、あかるい世界のなかで、しあわせに生きつづけていただろう。

ワシは、くさびがたの尾をしていた。つばさをひろげると、ニメートルもある、巨大な鳥であつた。

ある日、ワシは、ゆつくりと航海していく巨大な竜形船さながらに、ナラボーから、空中に、姿をあらわした。おそらくは、つれあいをさがしていたのだろう。あるいは、かんばつのために、農地におりて、たべものと水をさがそうとしていたのかもしれない。

それはともかく、自分が空全体の所有者でもあるかのように、空高く、こがね色の光のなかを、ゆるやかに旋回した。つばさをばたばたさせることもなかった。巨大なグライダーのように、つばさをからだからまっすぐ横にだし、風の